
冬虫夏花

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬虫夏花

【Nコード】

N1705L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

冬は滅茶苦茶厚着の真紀は夏は魅力的な女の子に変わってしまった沖縄娘。その彼女が冬に薄着になった理由は。学園ものです。

第一章

冬虫夏花

冬は目立たない。そんな女の子である。

「あれ、あんたいたの？」

「何時の間に来てたの？」

遊ぶ約束をしていた女友達に待ち合わせの場所でこう言われる始末である。

「気付いたらいたけれど」

「何処にいたのよ」

「今来たところだけれど」

その地味な服装で言う彼女だった。見れば黒いコートにロングスカート、それにグレーのマフラーとくすんだ白のミトンである。そんな重装備である。

「けれど。寒いわね」

「寒いのはわかるけれど今のはあんたって」

「何ていうか地味？」

「地味っていうかめっちゃくちやよね」

その彼女の姿を見て皆言う。呆れてさえない。駅の改札口の前のその白く詰めたコンクリートの中で皆彼女に対して話すのである。

「女の子同士で遊びに行くけれど」

「もっとお洒落したらどうなの？」

「そうよ。折角なんだから」

「だから寒いから」

顔の下半分はマフラーで隠れている。それで目だけが見える。髪の毛は上でまとめていて帽子の中に入れている。その帽子もロシア人が被る様な帽子である。

「それでなんだけれど」

「だから寒いのはわかるわよ」

「それはね」

皆それはわかるという。見れば彼女達もコートやマフラーやジャケットを羽織ってはいる。その舌にはセーターも着ている。しかしその娘程重装備ではない。

「けれどあんたそれって」

「ロシア人？」

「モスクワにでも行くの？」

「モスクワみたいに寒くない？」

彼女は困った目で言う。顔から見えるのは目だけである。その肌はよく日焼けしているのが覗く。しかし顔の上半分の僅かな部分だけが顔から見える。

「今日って」

「今日はまだそんなに寒くないわよね」

「ねえ」

「全然大丈夫じゃない」

皆はこう言い合う。

「それなのに耳に覆いまでして」

「幾ら何でもやり過ぎでしょ」

「そんなにここって寒いのか？」

「寒いわよ」

彼女は言うのである。姿勢も縮んでおり如何にも寒そうである。その中で小さな声を出すのだ。

「とても」

「まあ寒いのは仕方ないけれど」

「それでもそれはないんじゃないかしら」

「全く。何で冬になったらそんなに重装備なのよ」

「学校でもそうじゃない」

皆は呆れながら口々に言っていく。どうしてもなのだった。

「分厚いコートにマフラーに」

「しかもよ」

まだあるのだった。

「スカートの下は毛糸のパンツに厚いストッキングとタイツまで履いて」

「色気も全然ないじゃない」

「寒いから」

また言う彼女だった。

「寒いから仕方ないじゃない」

「やれやれ。こんなのじゃ彼氏なんてとても」

「できないわね」

「全く」

そんな話をしながら遊びに向かう。冬の街は彼女にはとても辛いものだった。しかし夏になるとこれが。見事なまでに一変するのであった。

「お早う」

学校に来たのは健康的な美少女だった。短く折ったスカートに茶色の長い腰どころか膝まである髪を頭のやや上で束ねてポニーテールにして白いブラウスからは胸が零れそうである。目ははっきりとして大きく細い眉も気が強そうである。しかし顔立ちははっきりとしており整っている。そんな彼女がクラスに入って来て皆に元気よく挨拶をするのだ。肌は奇麗に焼けて小麦色のそれを皆に見せている。

第二章

「皆元氣？」

「いつもながらあんたは」

「夏には変わるわね」

「全く」

「そうかしら」

彼女は冬と一緒に遊んだクラスメイトの呆れた声に應える。彼女達もその格好は夏に相応しいものだが彼女程ではない。全く違っていたのだ。

「ねえ真紀」

「あんた夏は何でそんななのよ」

「冬と全然違うじゃない」

「そうそう」

ここで彼女の名前が言われる。安座間真紀というのである。これが彼女の名前だ。

「夏になったら全然」

「何でそこまで変わるのよ」

「夏大好きだからよ」

真紀は明るい声で話すのだった。話しながら自分の席に座る。そのうえで皆に話す。

「それはね」

「夏大好きって」

「それでも服装とか全然違うし」

「冬なんか凄かったのに」

「ねえ」

そして冬の彼女の話をするのだった。

「コートなんかあんなに分厚くて」

「しかもセーターまで来て」

「カイロまでべたべた貼ってたじゃない」

「だから。冬は苦手なのよ」

真紀は困った顔で彼女達に返す。見れば皆真紀の後ろに集まっている。そのうえで皆であれこれと話をしているのである。如何にも女子高生らしい話のやり取りをだ。

「私沖縄生まれだし」

「沖縄ねえ」

「沖縄ってそんなに暑いの」

「それで冬は暖かいの」

「それと比べたらここは地獄よ」

彼女はその冬の寒さを地獄までと言うのである。

「何なのよ、この冬の寒さは」

「夏の暑さは平気なの」

「それは」

「ええ、平気よ」

それはいいのだという。今のこの季節はである。

「それはね。全然平気よ」

「私達には辛いけれど」

「結構ね」

「ねえ」

「それだけでけれど」

その困った顔になっている彼女達にさらに言うのであった。

「いいかしら」

「いいかしらって何が？」

「何かあるの？」

「泳ぎに行かない？」

「泳ぎって？」

「そう、海によ」

楽しそうに笑って皆に言うのである。

「どうかな、今度の日曜」

「海ねえ」

「確かに最近暑くなってきたし」

「海開きになったし」

皆そのこと自体には賛成はした。

「けれど。どうなのよ」

「あんたは」

「私はって？」

「水着とか持ってるの？」

「それあるの？」

「あるわよ」

それはあるというのである。それもはっきりと。

「この前の休みの時にもう買ったから」

「やれやれ、何かもう最初から決めていたのね」

「とっくになの」

「まあね」

それを否定しない彼女だった。

第三章

「それはそうだけれど」

「私達もそうだけれどね」

「もうね」

「何よ、一緒じゃない」

「いや、一緒じゃないから」

「それは」

皆は今度はこう返した。

「あんたみたいに立派なスタイルじゃないし」

「冬にはそんなの全然見せなかったじゃない」

「だって寒いから」

冬の話になるとである。彼女は急に口を尖らせる。そうしてまた言うのであった。

「沖縄生まれにはこの冬はね」

「常夏娘ってわけね、全く」

「それでなの」

「そうよ。夏よ」

真紀は夏の話になると機嫌を戻した。言葉のテンションもあがる。

「夏は大好きよ」

「それじゃあ今度の休みよね」

「海ね」

こうして皆で海に行くことになった。海は白い砂浜と青い空の間にそのマリンブルーが広がっていた。そして女の子達の水着も。

皆それぞれ一生懸命に選んだ水着で着ていた。ワンピースにビキニでそのスタイルを誇っている。それは彼女達だけではなく真紀もだった。

その真紀は白いビキニである。豊かな胸に奇麗な腰のライン、そして脚線美が周りの注目を集めている。皆その彼女を見て感嘆さえ

していた。

「反則ね」

「っっていうか最終兵器？」

「もうその域に達してるわね」

真紀のそのスタイルを見て口々に言う。

「しかも顔もいいし」

「どうなのよ、これって」

「神様は不公平よね」

「不公平かな」

しかし当の真紀にはその自覚がない。それも全くである。

「皆だって可愛いじゃない」

「可愛いとかそういうのじゃなくてよ」

「そう言ってくれたのはいいけれどね」

「あんたは可愛いってレベル超えてるの」

「とっくにね」

羨望や嫉妬の目になっている。細めさせたその目をさらに横目にしてである。そうした目で真紀を見ながらそれぞれの口で話すのである。

「上に超がつくわよ」

「戦略兵器ってレベルでね」

「その域まで達してるわよ」

「言い過ぎよ、それは」

言っているその側から身体を動かす。すると胸が大きく動く。白いビキニからその豊かな胸がはちきれんばかりに動いている。ぶるぶると音さえ鳴りそうである。

皆はその胸を見てまた言うのであった。

「三桁いってるの？ひょっとして」

「サイズどれだけなのよ」

「何カップ？」

皆の言葉はさらに続く。

「天は二物も三物も与える」

「お尻もいいし脚も奇麗」

「どうなってるのよ、世の中って」

「だから私は別にね」

そう言われてもであった。真紀は何も気付いていなかった。自分ではある。

「そんなことは」

「はいはい、自覚がないから」

「夏の為に生まれた娘だから」

「本当にね」

「それでどうするの？」

真紀はここで話を切った。そうして言うのであった。

「これから」

「これからって？」

「何かあるの？」

「だから泳ぐの？それともビーチバレーでもするの？」
「こう皆に尋ねるのである。」

第四章

「何をするの？食べるの？」

「ああ、海で何をするか」

「それなのね」

「そうよ、それよ」

まさにそれであった。彼女が言うことはだ。

「折角海に来たのに。何を言ってるのよ」

「忘れてたのよ、あんたを見て」

「そうよ、あんたをね」

あらためて見るとだった。やはり顔も胸も立派なものだ。モデルやアイドルとしても充分以上に通用するような、そんな外見であった。

「忘れてたのよ」

「ついね」

「それでどうするのよ」

真紀の問う言葉は変わらなかった。

「泳ぐの？それともビーチバレー？」

「そうね。視線が気になるし」

「周りのが」

見ればビーチにいる皆が真紀を見ていた。注目しているのは彼女達だけではなかった。誰もが彼女を興味深い目で見ていたのだった。

「海に入りましょう」

「少しは隠せるしね」

こう言ってであった。泳ぐことにした。とにかく夏にそのスタイルを見せる彼女だった。

そんな真紀だが冬は堅固になるのは変わらない。やはり冬になると完全装備になってまさにロシア人そのものの格好になるのである。

「またそうなるのね」

「冬だと」

「寒いから」

マフラーに覆われた口から言う。

「だから。ちよつとね」

「寒いのはわかるけれど行き過ぎよ」

「夏の元氣何処行つたのよ」

「登校でもその装備なんて」

やはりコートにマフラーにミトンにストッキングにスパッツである。帽子や耳当ても健在だ。

「あのね、シベリアじゃないんだから」

「そこまでしなくてもいいじゃない」

「ここまでするわ」

ところが彼女の言い分ではこうなる。

「あんた達こんな寒いのに平気なの？」

「まあ平気じゃないけれど」

「あんた程じゃないわよ」

呆れた目で彼女を見ながらの言葉である。真紀はその格好で自分の席に座る。しかしコートもミトンも脱がない。脱いだのは帽子と耳当てだけでマフラーもそのままである。長い髪が帽子からばさりと落ちる。

皆その彼女に。さらに言った。

「コート位脱ぎなさい」

「ミトンもね」

「寒いから嫌よ」

ところが真紀はこう返す。自分の席にうずくまるようにして座ってだ。

「そんなの脱げないわよ」

「どうせ制服の下セーターでしょ？」

「しかもカイロ一杯貼ってるんでしょ」

「それでも寒いのよ」

うずくまったまま答える。

「今は」

「こりゃ駄目だ」

「ヒーターつける？ だったら」

「もうつけたわ」

言われる前にであった。

「それは。教室に入ってすぐに」

「あらあら、もうなの」

「早いわね」

「寒いから」

またこのことを言うのだった。

「着けないとやっていけないじゃない」

「だから今日はそんなに寒くないわよ」

「ねえ」

クラスメイト達はそうなのだった。

第五章

「別にね」

「何ともないわよね」

「私には違うのよ」

身体を縮み込ませたままである。

「この寒さ。沖縄とは全然違うから」

「ウチナー娘には辛いよね」

「この寒さが」

「夏が恋しいわ」

そしてこんなことも言うのであった。

「何とかならないの？この寒さ」

「何とかって言われてもね」

「ここ沖縄じゃないし」

「だからね」

「ねえ」

彼女達にはお手上げだった。天候はどうしようもなかった。結局真紀は放課後までずっとマフラーもコートもミトンも脱がなかった。先生も何も言えなかった。

そんな冬を過ごす彼女であった。外出の時でもある。そんな彼女に冬に声をかける男はいなかった。その重装備の下にあるものを知っているだけだ。

しかしある日であった。同じ学年の三原篤という男が出て来た。伸ばした黒髪を整髪料で濡れたようにしていて濃い黒の眉は細めで一文字にやや斜め上になっている。少し垂れ目の形だが奥二重になっていてその光は強い。口も一文字である。かなり強そうな印象を与える顔で背は一七五あるかどうかだがそれでもその背丈よりは高い印象を受ける。

その彼が真紀に声をかけてきたのだ。

「なあ、安座間」

「ああ、三原ね」

「そうだよ、三原だよ」

一年の時同じクラスだったのでお互いのことは知っていた。

「久し振りだな」

「それで何の用なのよ」

「御前今日暇か？」

こう彼女に声をかけてきたのだ。

「御前さ、今日どうなのよ」

「寒いからすぐに家に帰りたいけれど」

服は相変わらずである。廊下を出るともう帽子に耳当てをしている。その装備をしてもう家に帰ろうとしているのである。寒いからである。

「もうね」

「暖かい場所なんだけれどよ」

篤はそんな彼女に呆れながらも述べた。

「いいか？それで」

「暖かい場所？」

「酒飲みに行こうぜ」

こう言うのである。

「今からな」

「お酒ね」

「カラオケ行かないか？」

具体的にはそこだというのである。

「カラオケな。どうだよ」

「寒くないの？そこ」

「何で寒いんだよ、ヒーターあるだろ」

「あるけれど寒いわよ」

無然とした顔で言う真紀だった。

「沖繩とは違うし」

「沖縄の冬ってそんなに暑いのかよ」

「暖かいのよ」

こう言い換えるのだった。

「全然ね」

「そうかよ。そんなにか」

「沖縄の冬が懐かしいから。それと比べたらここって」

「そうか、滅茶苦茶寒いのか」

「寒くて死にそうよ」

とにかくこれに尽きた。彼女にとってはである。

「もうとにかくね」

「やれやれだな。だからそのカラオケ屋はな」

「暖かいの」

「だからヒーターあるんだって」

とにかくそれを言う彼だった。

「もう暑い位だよ」

「そう、暑い」

それを聞いて真紀の心が動いた。寒いのは苦手だが暑いのは得意なのである。やはりこの辺りは沖縄出身だけはあった。夏娘なのだ。

「暑かったら」

「行けるか？」

「そうね。だったら一緒に」

それに乗る気になった。

第六章

「行ってもいいかしら」

「助かったよ。実は一緒に行く奴に急用ができてな」

「それで私なの」

「御前が空いてなかったら一人で行くつもりだったんだよ。けれど一人でカラオケ行っても全然面白いものじゃないだろ」

「確かにね」

「だからなんだよ」

それが理由だった。彼には彼の理由があったのである。

「それはな」

「理由はわかったわ」

「嫌ならいいけれどな。無理強いはしないしな」

「いいわ。暑いのなら」

「それでいいというのが彼女だった。」

「とにかく寒くて寒くて仕方ないし」

「今日そんなに寒いかな？」

「私には寒いよ」

このやり取りはクラスメイトの女の子達と一緒にだった。

「だから。それでいいのよ」

「そうか。じゃあ酒もあるからな」

「それを飲んであったまってね」

「制服は隠せよ」

このことは流石に言う。やはり制服で酒を飲むことはできなかった。

「いいな、それはな」

「このままでいけるから」

こう返す彼女だった。

「大丈夫よ」

「まあそうだな。っていうか制服全然見えないしな」

何もかもがコートにスパッツにマフラーで隠れている。これで女子高生という方が遥かに無理があった。シルエットを見れば達磨である。

「御前はそれでいけるよな」

「あんたは服あるの？」

「コート着れば終わりだしな」

笑いながら言う彼だった。

「俺にしてもな。マフラーもあるしな」

「じゃあそれでいいわね」

「ああ、じゃあ行こうか」

「ええ、それでね」

こうして二人はカラオケボックスに行ってそこで歌って飲むことになった。暗い部屋の中は柔らかいソファ―と木とプラスチックのテーブルがある。そしてテレビの画面もだ。

その部屋に入って二人でどんどん歌っていく。制服を脱いで隠してそのうえで酒を注文してそのうえで飲む。真紀が頼む酒といえ

ば「泡盛なんだな」

「これしかないじゃない」

飲みながらこう返すのだった。

「沖縄人はこれを飲んで育つのよ」

「暑いのにそんなに強い酒飲むんだな」

「余計に暑くなっているのよ」

こう言うのである。

「だから飲むのよ。わかる？」

「今一つわからない理屈だな」

篤はビールを飲んでい

る。それを飲みながらの言葉だ。二人の前には酒以外にピザやソーセージといったものが置かれている。

「そんなものか」

「そんなものよ。とにかくね」

「泡盛なんだな」

「そうよ。いつもこれ飲んでるのよ」

彼女はその泡盛をごくごく飲みながら話す。

「お家でもね」

「俺はビールだけれどな」

「ビールは乳酸溜まりやすいから注意した方がいいわよ」

「けれどあまり強い酒飲めないんだよ」

こう言って顔を顰めさせる篤だった。

「実際のところな」

「ワインとかはいける？」

「それはいけるけれどな」

「じゃあそっちにした方がいいわよ」

「それが身体の為か」

「そうよ。泡盛だってね」

真紀はその飲んでいる泡盛のことも話す。

第七章

「身体にはビールよりずっといいのよ」

「それ飲んでるから沖縄人は長生きなのか？」

「あとこういったのも食べるからよ」

見ればテーブルの上にはピザやソーセージだけが置かれてはいなかった。その他には足てびちやミミガーやゴーヤチャンプルもあった。ソーきそばもある。

「どれもね。身体に凄くいいから」

「それに美味しいな」

「やっぱり沖縄よ」

ミトンで箸を器用に使いながら食べての言葉だ。流石に今はマフラーで口を覆ってはいない。首には巻いているが。

「沖縄料理が最高よ」

「そうなんだ。だから」

「そうよ。ここのお店って沖縄料理もあるのね」

「何でも店長が沖縄出身らしくてね」

「あっ、ウチナンチューなの」

沖縄の人は自分達をこう呼ぶ。それに対して本土の人をヤマトンチューと言う。だがどちらにしても同じ日本人である。民族が違うだけである。それかなり混血しているので同じ存在であると言ってもいい。実際のところはそんな関係なのである。大した違いは全くない。

「そうだったんだ。だからこんなに美味しいんだ」

「本場の味？」

「ええ、間違いないわ」

また言う真紀だった。言いながらその沖縄料理をどんどん食べていく。

「これはね」

「そうなんだ。じゃあ気に入ってもらった？」

「とても」

満面の笑顔で答える。答えながらまた食べる。

「美味しいじゃない」

「そうだったんだ。それじゃあまたここに来る？」

「そうね、またね」

言いながらどんどん食べていく。それは篤もだった。

「俺も結構沖縄料理好きだし」

「じゃあ丁度いいわね」

「この泡盛って」

ビールを飲み干した後のそのグラスに泡盛を入れてみた。そして飲むとであった。

胃の中が一気に熱くなった。ビールのそれとは全く違っていた。その熱さを感じてだ。彼はまた言った。

「凄いね」

「そんなに凄いの？」

「凄いななんてものじゃないよ」

「こう言うのである。」

「もうね」

「美味しいでしょ」

「美味しいだけじゃなくて身体が一気に熱くなってきたよ」

「そんなに熱くなってきたの？」

「とてもね」

そう言いながら着ていたセーターを脱ぐ。そうして白いブラウスになるがここで真紀がその彼に対して言うのだった。

「あっ、シャツには」

学校のマークを指差すのだった。ビデオカメラがあってそれでチェックされているのはわかっているのですそれで指差して教えたのだ。

「いいわね」

「そうだよな。じゃあ」

「ばれたらあれだからね」

「だよな。流石にな」

「そうよ。それは気をつけないとね」

「わかったよ。それじゃあな」

セーターを着なおす。そうして暑くなってきたのは我慢した。

しかしであった。篤はここであらためて真紀のその重装備を見るのだった。それは彼のセーターどころではない。完全装備である。

「それにしてもよ」

「それにしても？」

「安座間ってそれで平気なんだな」

「そうだけれど」

「泡盛飲んでるよな」

見れば今も飲んでいる。それも確かめた。彼女は相変わらずどんどん飲み続けている。その一杯飲んだだけで熱くなるそれである。

「熱くないのか？」

「寒いけれど」

彼女の返答は今もこれだった。

第八章

「とてもね」

「そうなんだ」

「私にとつては寒いのよ」

そしてまたこう言ったのだ。

「滅茶苦茶ね」

「なあ、そんなに寒いかな？」

彼はそのことを問わずにはいられなかった。

「今本当に。そんなに寒いかな？」

「寒いけれど」

やはり返答は変わらない。

「今だってマフラー外してもね」

「そうか。ヒーターもかなり効かせてそれで随分食べて相当飲んでるのにか」

「それでも寒いだよ」

「どうなってるんだ？ 一体」

流石に彼もここまで寒がっているのを見ては首を傾げるしかなかった。彼が感じている感触では今は元々それ程寒くはなかったしそれにヒーターと食べ物と酒のせいで暑かった。セーターを脱ごうとさえした位だ。しかし彼女は全く違ふというのである。相変わらず。

「確かに沖縄って暑いけれどさ」

「だから沖縄とここは違うから」

こう言うのも同じだった。

「全然ね」

「何かどうしようもないのかな」

「寒くて仕方がないのよ」

言いながら泡盛をまた飲むのだった。

「今は」

「なあ、あのさ」

それがあまりにも信じられないので遂にこう言ったのだった。

「マフラー取ってみて」

「何でなの？」

「いいから取ってみてよ」

こう言うのである。

「マフラーね。取ってみてよ」

「寒いじゃない」

「いや、それでもさ。取ってみてよ」

「寒いのに？」

「いいからさ、取ってみて」

とにかくそうしてくれというのである。

「いいわね」

「どうしても？」

「少しだけならいいから」

それでもだという。彼にしてもかなりの譲歩だった。

「できるかしら」

「わかったわ。それじゃあ」

それに頷いてだった。彼女はそのマフラーを取ってみた。するとであった。

「あっ……」

「寒いかな」

「あまり、っていうか全然」

マフラーを取ってみての感想である。実際は全く寒くなかった。

マフラーがなくてもだ。そこからは夏の時と同じ奇麗な顔があった。

「寒くないわ」

「そうだろ？ 幾ら何でも寒くないんだよ」

篤はここでまた言うのだった。

「これだけヒーターかけて飲み食いしてるからね」

「それでなの」

「寒いって思うから寒いんだよ」

「そうだったの？」

「そうだよ。ほら、見てよ」

篤はここで部屋の温度計を指し示した。ヒーターのスイッチのところにあるものをだ。それを指し示してそのうえで教えたのである。

「今二十度超えてるよ」

「二十三度ね」

「それで寒い筈ないじゃない」

実際に示されている温度を見せての話だった。

「そうだろ？　どうかな」

「確かに寒くないし」

実感できた。脱いでみると確かにであった。

「そうだったの」

「意外だったかな」

「意外も意外っていうか」

真紀は驚きを隠せない顔で話していく。

「寒くなかったの」

「そうだよ、寒くなかったんだよ」

このことをまた彼女に話した。

第九章

「これでわかったよね」

「わかったわ。そうだったのね」

「コートは脱げるかな」

「ええ、それじゃあ」

それも脱いでみる。するとであった。

寒くなかった。しかも全くだ。

驚きを隠せないまま。彼女はまた言うのだった。

「どうかな」

「やっぱり寒くないわ」

「ええ、全然」

そうだというのであった。

「コートを脱いでも」

「だから暑い位なんだよ」

彼はまたこう話した。

「今はね」

「そうだったの」

「確かにさ、安座間は沖縄出身だし」

それはもう何があっても変わらない事実であり前提であった。だから篤もこのことを強調して述べたのである。

「ここの寒さにも弱いよ」

「ええ」

「けれどだよ」

それでもだというのである。

「実際脱いでみるとそうでもないだろ」

「意外とね」

「思い込んでるだけだったんだよ、そこまで寒いつてね」

「そうだったのね。私が思っている以上に暖かったのね」

「そりゃシベリアじゃないんだからさ」

笑ってこんなことも言う彼だった。

「ここはさ」

「わかったわ。じゃあ手袋もね」

「ああ、それもね」

それも脱ぐのであった。するとやはり寒くはなかった。彼女はそれで余計に笑顔になった。

そうしてさらに飲み食いしてであった。カラオケをして楽しく暖かい時間を過ごした。ただ店を出るその時である。二人は少し工作に明け暮れていた。その工作はというと。

「制服はな」

「学校のマークもね」

「見えないようにしないと」

「そうそう、お酒飲んでるし」

二人共もう顔は真っ赤であった。それだけ飲んだということである。

「ばれたら停学だしな」

「気をつけないと」

「よし、これでいいよな」

「私もいいわよね」

お互いにチェックもし合う。見ればお互い何の問題もなかった。

「よし、それじゃあ」

「お店出ましょう」

「顔はどうしようか」

ここで篤はふとこんなことも言った。

「安座間顔真っ赤だし」

「そっちもよ」

「ええと、これは仕方ないかな」

「そうね。何も知らないふりして出ましょう」

こんなやり取りをしてカラオケボックスを後にした。それから

二人でデートであった。そしてその次の日からの真紀はというと。
コートは着ていた。一応ミトンもしている。マフラーもだ。だが
帽子と耳当てではなく下もストッキングを二枚重ねだけである。それだ
けであった。

「えっ、急にまた計装備になったわね」

「どうしてなの、また」

「何かあったの？」

「うふふふ、しかもよ」

クラスの面々が驚く中でコートを脱いでみせる。すると制服の下
にセーターを着ているだけである。そして小声で彼女達にこんなこ
とを囁いた。

第十章

「ババシャツもカイロも毛糸のパンツもなしよ」

「スパッツもないわね」

「それじゃあ本当に」

「そう、これだけよ」

そうだというのであった。まさにそれだけであったのである。皆これを見てあらためて驚いた。昨日までの重装備ではないからである。

それでついつい。こんなことを言うのだった。

「奇跡が起こったっていうか」

「天変地異!？」

「今日はかなり冷え込んでるのに」

「わかったのよ。あまり寒いって思うとかえって寒くなるってね」
彼女はこう話した。

「これだけでいけるってわかったの」

「あつ、そういえばあんた昨日」

「三原とカラオケボックス行ったわよね」

「そうよね」

「ええ、そうよ」

このことにもにこりと笑って話した。

「それからわかったのよ」

「そうだったの。っていうと」

「あいつに何か言われたのね」

「一体何がなのよ」

「簡単に言くと北風と太陽よ」

童話である。それだというのだ。

「それでなのよ」

「ということはあんたは」

「その重装備を脱がせられたのね」

「それもなの」

彼女達もそのことがわかった。そしてそれだけではなかった。そこから先のこともだ。すぐに察したのであった。

「夏みたいになったのね」

「しかも一糸まとわぬ」

「ま、まあそれはね」

こう言われると焦った顔になった。凶星である何よりの証拠であった。

「何だかんだでね」

「やれやれ。けれどよかったじゃない」

「寒くないってことがわかっておまけに彼氏までできて」

「万々歳ね」

そして皆そんな彼女に対してまた告げた。

「これであんたは冬でもね」

「その魅力出せるようになったし」

「よかったよかった」

「それじゃあ今日は」

夏のその顔での言葉だ。

「街行かない？ ショッピングで」

「あら、今日は寒いわよ」

「それでもいいのね」

「ええ、もう寒くないからね」

真紀は皆の悪戯っぽい言葉ににこりと笑って返した。

「だからいいのよ」

「言ったわね、それじゃあ」

「行くわよ、ショッピングね」

こんな話を笑顔でする真紀だった。もう彼女は寒さは感じなくなっていた。もう夏の時と完全に同じ顔になっている彼女であった。

冬虫夏花

完

2009.12.26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1705/>

冬虫夏花

2010年10月8日15時31分発行